

特集 「ボス弁」と「イソ弁」

「イソ弁」岡村泰郎君の一年をふりかえって

私は、春秋会ニュース第一号(昭和六一年六月発行)の新入会員紹介の中で岡村君のことを「十

分事情聴取できていない事件、不十分なままの指示、情報の混乱、そのような中でのスピードと

一定の質をもった自己判断と事務処理ができる弁護士—これは最近少ないタイプであり、希少価

値というべきものである」「坂和事務所に突如出現した強力な助っ人である」と書いた。

私はこの一年間の彼の働き振りを見て、ますますこの評価が正しかったことを確信している。

◇正直言って「イソ弁をとる」(この言い方には抵抗感があるが)ということにはかなりの不安があっ

た。

「きちんと仕事はしてくれるだろうか?」「手とり足とり教えなければならぬとすれば大変だナア」

「人間的に問題はないだろうか?」という仕事・人間的な面での心配と、もうひとつは「弁護士が一

人ふえた分給料はきちんと払えるだろうか?」という経済的な心配である。

しかし、彼を迎えてこの二つの不安は全く不要であったことが実証された。

◇私は以前青法協のニュースに「修習生新人類論」というのを書き賛意と批判の両方を受けた。

この指摘がどこまで正しいかは別として、全体的な風潮として旧人類達からみれば、最近の修習

生が新人類として得体の知れない人種にみえる面があることは否定できない。

私なども新人類とつき合うのは「遊び」は別として疲れる典型的な旧人類の一員である。その意

味では旧人類であった岡村君にきてもらったことに感謝している。

◇彼の活躍の場は「都市問題研究会」にも大いに与えられ、都市再開発問題を中心とする「都市

問題」の研究は大いに深まった。

私自身、ここ一、二年は大阪駅前ビル問題、阿倍野の再開発問題などを契機として「都市問題」

に興味をもち、最近「土地信託」論とも結びついて、実践上の問題点、学術論争上の問題点共

に、最先端の議論に触れて大いに刺激をうけている。

彼はこの「クラブ活動」を私と共に熱心にやってくれた。

この春(五月頃)には、彼を含めた三人の弁護士で執筆する都市問題の本も出版される予定であ

り、弁護士一年を経て共同執筆者の一人となるまでの彼の成長を頼もしく思っている次第である。

◇最後に注文を一つだけすれば、弁護士会の健康診断のたびにウエストが2cmずつ大きくな

るとの「報告」を聞いているため、養食飽食の弊におちいらぬよう用心してもらおうことである。

彼の二年目の更なる成長を期待し、私としては一日も早く「坂和・岡村共同事務所」に改めたいも

のと考えている。